平成5年（1993年）11月10日　教皇様の声（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）
11 NOVEMBER,1993　毎月10日発行　第163号

教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1993
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

人はみな、神のもの

（以下はローマ、カンポ・ベラノ墓地での諸聖人の祝日のミサで、教皇様がされたお話である。）

「地はすべて主のもの。」（詩篇24（23）・1）

先ほど唱えた答唱詩篇は、創造主の栄光を歌っています。「地とそこにあるもの」は主のものです。詩篇作者の考えでは、地が創造のかなめだったのですが、現代の私たちは地球が宇宙の中心ではないことを知っています。従って、地球を含む太陽系だけが「主のもの」ではありません。全宇宙を構成する多くの銀河系も主のものなのです。

「世とそこに住む者、すべて主のもの。」（同・1）

地球が宇宙の中心ではないにせよ、他の惑星から区別される点は、そこが人類の住む所、人類が生れ、生きて死ぬ舞台だということです。地球は人類の「世」なのです。この「世」は人の「世」であり、特別に主のものです。そこに住む人類が、主のものであるからです。　人類は、どのように「神のもの」なのでしょうか。

人は神を求めるよう呼ばれている

詩篇と今日の典礼はこの問いに答えて言います。人間は神のかたどりであり、全ての人が神に似せて造られたのだから、神のものであると。人はこうして目に見える他のあらゆる被造物とは違った形で、主のものです。

人間は「主の山に登る」（詩篇24（23）・3参照）ことができます。その霊的な存在の深みで「主を求め」「み顔をしたう」（同6参照）よう呼ばれています。元来「神に似せたかたどり」であるがゆえ、「その聖所に立つ」（同3参照）よう召されているのです。

人は成長し、「清い手」と「純な心」（同4参照）で生き、罪と「いつわりの誓いを立てる」（同4参照）輩に打ち勝つという、動的で力強い歩みを続けます。

このように、人は神のものです。全被造物の中で、人類は神の特別な祝福を享受しています。

この神からの祝福は、キリストにおいて完成し、こうして人間は神を父と仰ぐことができるのです。御父と同質の永遠のみことばが人となり、人間の心の中に神の息子、娘であるという秘義を植えつけてくださいました。「考えよ、神の子と称されるほど、御父から計りがたい愛を受けたことを。私たちは神の子である。」（Ⅰヨハネ3・1）

ただ一人聖なる方イエズス・キリストは、諸聖人の交わりへの道を開いてくださいました。「主が清い御方であるように、主に対するこの希望を持つ者は清くなる。」（同3・3）

聖性への道程は、すなわち神のうちに生き、神の生命を生きる聖人たちの交わりへと向かう道程であり、福音の至福八端を通じて可能になります。

今日、教会は立ちどまってこの広大無辺な創造の秘義を熟考しなければなりません。教会は「神のみ顔を慕う」世の人々が形作ってきたこの世の歴史の中に、この秘義を熟考しています。

「私はすべての国と民族とことばの、おびただしい数えきれぬ大群衆が現われるのを見た。彼らは…小羊の前に立ち…。」（黙示録7・9）　私たちも小羊の前に立っています。

この古いベラノ墓地は、亡くなった人々の体が憩う場所です。明日、各地の墓地では、とぎれることのない墓参者の列が続くでしょう。　しかし、いかに多くの墓地が人に知られず、いかに多くの人々が苦悩のうちに死に、愛する人の訪れるべき墓もなく葬られていることでしょう！

私たちは年ごとに、死せる信者たちの記念を行って一年をしめくくります。人類の全歴史もそのようにして、振り返ることができましょう。

それでも今日、世の罪を取り除く神の小羊の聖体祭儀にあずかる私たちは、主に申し上げたいのです。「あなたはすべてのことを知りたもう。」

「彼らは大きな艱難を抜け出た人々である。小羊の血で自分たちの服を洗って白くした。」（黙示録7・14）

主よ、ご存じでしょう。彼らはあなたのもの、皆あなたのものです。彼らを御父にお捧げください。アーメン。（十一・一）

死の恐怖に……応える信仰

（教皇様は、聖心カトリック大学主催の臨終者看護に関する国際会議参加者を前に、このデリケートな問題に関連した倫理的な局面について、イタリア語でお話しになりました。）

☆

一九八五年、聖心カトリック大学に創設された生命倫理学センターの主催で開かれた国際会議、題して「臨終者の看護、その社会的、文化的、医学的、司牧的局面」の発起人並びに参加者としてお集まりの皆さんを、今朝この特別謁見にお迎えし、嬉しく思います。（…）

このテーマが選ばれたのは、死をめぐる多くの疑問や恐怖に対し、明確で思慮深い応答を提供し

なければならない時節の要請に促されたものであることは確かです。現代社会に生きる人々は、めったに死の準備をすることはありません。それゆえ、会議の作業を通して皆さんは、死に関するデリケートな諸問題についての多くの複雑な局面に光を当てようと努力してこられました。それは社会・臨床・人類学的な局面を合せ持つ課題であり、また神学・倫理学・司牧的な含みのある課題でもあります。

☆死から、人間であることのドラマが出てきます。すなわち、この「ゴール」に直面して、人はこの世における自分自身の存在の意味を不思議に思わざるを得ません。古今の文学、哲学、社会学、倫理学、そして道徳、芸術、詩歌、全てがこの基本的な、不可避の話題について問いを発します。しかしその答えは、時に混乱し、矛盾し、また時には全く絶望的なのです。

全ての人が、時には過度に、物質的な安楽を求めます。しかし何をしたとしても苦しみと死という不可避の限界を体験する時が来ます。その限界には不確実と寂寞、憂慮と渇望がつきまといます。

死の神秘に直面して、人々は無力です。人間的に確かだと思っていたものが揺らぎ始めます。けれどもまさにこの挫折の時、キリストへの信仰全体が理解され、受け入れられるならば、それこそ光と平安のみなもととなります。実際、福音の光に照らされて始めて、新たな超自然の見方ができるようになります。無意味と思われたものが、意味と価値とを獲得するのです。

☆信仰と希望という救いのメッセージに接する機会が全くなければ、結果的に愛徳の説得力が弱まり、功利主義や実用主義の原則が幅をきかせて、ついには自分や他の人々の負担となるような生命を奪うことは論理的で正当化されるとさえ、考えるようになります。ある種のイデオロギーに強いられ、それがマス・メディアに助長されて、明らかに人の尊厳に真っ向から反するような倫理行為を容認し、あるいは正当化するような危険を世論も冒すに至るのです。たとえば堕胎、新生児に対する尚早な安楽死、自殺、末期患者に対する安楽死、その他遺伝学における気がかりな介入の数々、など。

ことに劇的で困難な場合に直面すると、信者であっても、当惑のあまり確固とした説得力ある根拠を見失ってしまいます。そこで必要なことは、キリストの教えに従って良心を形成し、根拠のない意見を避け、意地の悪い質問には適切に応答し、諸問題と対決し、解決するに当っては常にキリストと教会の教導権に聴くことです。

☆特に避けることのできない死という出来事について、教会は何度も繰り返し永遠の教えを伝えます。その教えは過去と同様に今日も有効であり、その基礎はキリストの教えなのです。

創造主からの贈り物である生命は、兄弟姉妹に仕えるために与えられたのであって、兄弟姉妹は救いの計画によって常にその恩恵を享受することができるはずです。ですから、生命を妨げることは、その始まりから自然の終りに至るまでのどの段階においても、決して許されません。むしろ生命は、受け入れ、尊重し、できる限りの手段を尽して促進するべきもの、あらゆる脅威から守るべきものです。

この点に関して思い出していただきたいのは教理省が一九八〇年五月五日の「安楽死に関する声明」で断言している箇所です。「何事であっても、誰であっても、罪のない人間を殺すことは許されない。それが胎児、幼児であろうと、成人、老人であろうと、不治の病に苦しむ人であろうと、臨終の人であろうと、同じである。さらに、何びとも、この殺すという行為を求めることは、自分自身にも、自分の看護を委託されている他人にも許されないし、これに同意を与えることも、あからさまであれ、含蓄的であれ、許されない。どんな権威筋であれ、このような行為を勧めることも、許可することも不法である。というのは、このようなことは神の法に違反する問題であり、人間人格の尊厳に対する侵犯であり、生命に対する犯罪であり、人類に対する攻撃だからである。」（2番）

また、ことさらに病人を消耗させ、負担をかけて事実は人工的に苦悶を長引かせるだけのさまざまな治療について、先に引用した声明はこのように続けています。

「手段を尽したにも関わらず、避けられない死が迫ったとき、同種の病人に施す通常の看護を中断しない限りは、延命のため不確実で負担を強いるだけの治療法を拒否する決断をすることは、良心的に許される。」（4番）　他方、現代医学では病者の尊厳を尊重しつつ、苦しみを和らげる手段もあります。

☆死はまさしく神秘的な瞬間であって、その時、人は愛情と尊敬とをもって取り扱われなければなりません。幸いにも皆さんの会議では、臨終段階にある患者に対する人間的・精神的な看護に関する諸問題を検討されました。

なかんずく生と死の間をさまよっている人には、愛する者の臨席が必要です。人生の最後の段階は、昔なら、家族の人々に助けられて静かな反省とキリスト者らしい希望の雰囲気のうちに迎えるのが普通でしたが、昨今は病気の生理学的な局面にもっぱら関心を持つ健康管理者の監督のもとに、まわりが大勢の人でざわざわと忙しい中で迎えなければならないことがしばしばです。こうして、死が臨床学的なものとなる場合が多くなり、苦しんでいる人の複雑な人間的状況への敬意が姿を消して行く状況です。

臨終の人が間もなく永遠の神と向き合うことを認識した以上は、親族、愛する人、医者、看護者、宗教人は、この人生における決定的な場での手助けに当って、霊的な事柄を含む、存在の全面にわたる関心を持たざるを得ません。

別の機会にも申し上げましたが病気の人、特に臨終の人には親族の愛情、医者の看護、友人の応援が欠けてはなりません。経験から学びましたが、臨終の人が神への信仰と永遠の生命への希望から受ける助けは根本的に重要であり、人間的な安楽以上のものです。

☆皆さんのお仕事に深く感謝し、引き続き生命の擁護と促進のため献身してくださるようお願い申し上げます。「生命の福音」の証人となってください。福音のメッセージに責任を感じ、「世の趨勢に抗する犠牲を払ってでも、勇ましく、恐れず、言葉と行いとをもって、個人、諸国民、諸国家に宣言しなければなりません。」（一九九一年四月の臨時枢機卿会議の後、全世界の司教宛て教皇ヨハネ・パウロ二世書簡）

皆さんが技量と責任をもって病人を看護し、生命を守るとき、それは人類への専門的で価値ある奉仕です。願わくはこの使命に、託身のみことばの御母マリアの保護と支えがありますように。私の祝福が皆さんと共にありますように。（九二・三・十七、ローマ）

【カテケージス・シリーズ別売のお知らせ】
「教皇様の声」に掲載されたカテケージスのシリーズのコピー版を別売しております。　ご希望の方は精道教育促進協会まで。

説教・講話・書簡等の抄訳

シリーズ（1）「創造」「信仰と神」「天使の創造」「神の摂理」…九二頁、一〇〇〇円
シリーズ（2）「イエズス・キリスト―真の人、真の神」…一〇八頁、一二〇〇円
シリーズ（3）「贖いと罪」「聖霊」…九七頁、一二〇〇円　（各巻送料共）

キリストは永遠の生命の種まき人

「その日イエズスは家を出て、海辺に座られた。」（マテオ13・1）

イエズスは教師です。自然を見る目も、教師のそれです。福音書を開くと、周囲の自然の中に浸り切ったイエズスの姿が随所に見えます。イエズスの振舞いをよく注意してみれば、例えば冒頭に述べた福音の箇所のように、創造のみわざの不思議に心を向けよというはっきりした呼びかけに気づくはずです。イエズスはテベリア湖の岸辺に座り、想いにふけっておられました。

夜明け前や日が沈んだ後、また公生活中の重大な折り折りに、神なる教師は好んで人のいない静かな所へしりぞかれました。（マテオ14・23、マルコ1・35、ルカ5・16参照）　天の御父と二人きりで話すためでした。このような時、創造のみわざに思いをひそめ、神的な美をそこに見出しておられたのは確かです。

湖の岸におられる主のもとに、弟子たちと群衆が集まってきます。「イエズスはたとえで色々のことを話された。」（マテオ13・3）　イエズスは「たとえで」話された、すなわち創造についての黙想から得られることと、日常の出来事とを用いてお話しになったのです。

しかし、なぜ「たとえで」お教えになったのでしょうか。使徒たちも同様に不思議に思いました。師の答えにはイザヤの言葉がこだましています。聞いても悟らず、見つめても見ようとしないから、と。（マテオ13・13～15参照）これらは何を意味するのでしょう。なぜ「はっきり話す」（ヨハネ16・29参照）ことなく、たとえを用いるのでしょうか。（…）

みことばは創世の書を説き明かす

イエズスがたとえを用いたのは、それが神の「流儀」だからです。御独り子は天の御父と同じように振る舞い、同じように語られます。御子を見た人は御父も見たのです。（ヨハネ14・9参照）御子を聞いた人は御父を聞いたのです。それは話された内容についてだけでなく、話し方についても、何を話したかということだけでなく、どのように話したかについても当てはまります。

そう、「どのように」が大事なのです。話す御方の深い意図がそこに表れているからです。相互の関係を対話にたとえるなら、相手の自由を尊重し、助けるような話し方をしなければなりません。だからこそ、主はたとえを用いられるのです。これなら聞く人が話の内容を受け取ろうが、耳を傾けまいが、随意です。とは言え、主の話を理解し、解釈し、その意図を悟ることもできるのです。神は人間が自由に神と出会うことができるようなやり方で、話しかけてこられるのです。（…）

「種まく人が種をまきに出た。」（マテオ13・3）

みことばの託身は、御父のまかれた最もすぐれた真実の「種」です。世の終りに収穫物が刈り取られ、人間は神の裁きを受けることになります。多くを受けた者は、多くを要求されるでしょう。

人間は自分自身のみならず、他の被造物についても責任を負っています。それは地球的な意味で言えることですが、実際、被造物の運命は時の中で、また時を越えて、人間とつながっています。人間が創造主の計画に従い、それを守るなら、全被造物を自由の王国へと導くことができます。同様に、あの最初の不従順のため、全てを自らと共に破滅に至らせることもできるのです。ローマ人への手紙の第8章で聖パウロが説こうとするのは、これについてです。

聖パウロの言葉は謎めいていますが、引きつけられるものがあります。キリストを受け入れることによって、人間は新しい生命の流れを創造された世界に伝えることができるのです。キリストを受け入れなければ、神の救いを自ら拒んだ結果を、宇宙そのものが罰として受けることになるでしょう。私たちの希望、全被造物の希望となるのは、キリストが人間の心に新しい不死の種をまいてくださったことです。それは救いの種であり、創造のみわざに神の国の栄光という新しい方向づけを示してくれます。（…）

（九三・七・十一）

教会は組織だった社会

教会シリーズ 17

使徒たちはペトロを頭とする教会の聖職位階制の礎となり、後継者たちがこれを引き継ぎます。

1

教会は、イエズス・キリストの制定による司祭的、秘跡的、預言者的な共同体です。その継続的な成長と発展のため、司牧者たちが統治する目的で、組織立った位階制をとっています。この司牧上の役割を最初に果したのが十二使徒で、教会の目に見える礎石とするために、イエズス・キリストがお選びになったのです。第二バチカン公会議によると、「永遠の牧者であるイエズス・キリストは、自分が父から派遣されたように、使徒たちを派遣して聖なる教会を建てた。（ヨハネ20・21参照）キリストはこの使徒の後継者すなわち司教たちが、自分の教会の中で世の終りまで牧者であることを望んだ。」（教会憲章18番）

この文章は、教会について述べた教義憲章（教会憲章）からの引用ですが、まず教会の制度的な局面に占める、使徒たちの最初のユニークな地位を思い起させます。福音書から、イエズスが弟子たちを呼び、その中から十二人を選ばれたことを私たちは知っています。（ルカ6・13参照）　福音書からわかるのは、それが終夜の祈りの後でなされた、イエズスにとっては決定的な選択であったということです。（ルカ6・12）それは最高の自由でなされた選択でした。聖マルコは、イエズスは山に登り、「みずから望まれた人々」をみもとにお召しになったと語っています。（マルコ3・13）　各福音書は召された人々の名前を挙げています。（マルコ3・16～19、その他並行箇所参照）　このことは、この人々の重要性が初代教会で知られ、認められていたことを示すものです。

2

十二使徒というグループを作ることによってイエズスは、福音と来たるべき神の国に仕

不変の教え

えるよう組織され、目に見える団体となる教会を創設されました。十二という数はイスラエルの十二族に通じ、イエズスがこの数を使われたことは、新しいイスラエル、教会となる新しい神の民を創設しようとする意図を示すものです。イエズスの創造の意図はマルコが教会創設の叙述に用いた言葉そのものに表れています。「イエズスは十二人を決め」とありますが、「決める」もしくは「つくる」という語は創世の書で世界創造の説明に、またイザヤ書（43・1、44・2）で神の民すなわち古代イスラエルの創造について用いられた動詞そのものを思い出させます。

ペトロは特別な役割を受ける

この創設の意志は、シモンにペトロと、ヤコボ、ヨハネに雷の子という新しい名をつけられたばかりでなく、全体としてのグループもしくは一団にも新しい名をお与えになったことにも示されています。実際、聖ルカはイエズスが「十二人を選んで使徒と名付けられた」と書いています。（ルカ6・13）　十二使徒はこうして一つの特別な、歴然とした社会・教会的現実となり、ある面で繰り返しのできないものとなりました。このグループの中で使徒ペトロは傑出しています。彼に関して、イエズスはシモンに与えた名によって、新しいイスラエルを創設しようとする意図を最も明確にお示しになりました。この「岩」の上に私の教会を建てようと仰せになったのです。（マテオ16・18参照）

3

十二使徒を任命されたイエズスの目的を聖マルコはこう説明しています。「イエズスはご自分の仲間として、また宣教に送るために十二人を決め、悪魔を追い払う権威をお与えになった。」（マルコ3・14～15）

従って十二使徒であるための必要条件の第一は、キリストに対する絶対の忠誠です。彼らはキリストがご自分の仲間とするために、つまり全てを捨てて従うために、お召しになった人々です。条件の第二は宣教の使命で、これはイエズス自身の、教えを説き、悪魔を追い払うという模範に示されています。十二使徒の使命は、キリストの弟子・友人・腹心として密接に結び付いた人間の側から、キリストの使命に参与することです。

4

使徒の使命について、福音史家マルコは「悪魔を追い払う権威」を強調します。これは悪に打ち勝つ力であって、その明らかに意味するところは、世の人人にキリストの救いを与える権威です。なぜなら、キリストは「この世のかしらを」追い出されるからです。（ヨハネ12・31）

十二使徒を任命するに当っての、この権威と目的の意味を確認するため、聖ルカは御国で使徒たちに権威を付与される時のキリストの言葉を伝えます。「私の試みの間あなたたちは絶えず私とともにいたのであるから、父が私のために王国を備えられたように、私もまたあなたたちのために王国を備えよう。」（ルカ22・28）　この宣言の中でも、キリストと最後まで一致していることが、御国で付与される権威との間に密接な関連を持っているのです。

この権能が司牧的なものであることは、特にペトロにゆだねられた使命についての記述で明らかです。「私の小羊を牧せよ…私の羊を牧せよ。」（ヨハネ21・15～17）ペトロは、司牧的使命で自ら最高の権能を受けます。この使命は、唯一の牧者であり、教師であるキリストの権能への参与として行使されるのです。

ペトロに託された最高の権能は、御国において他の使徒たちに付与される権能を無効にするものではありません。司牧の使命は、良き牧者キリストの代理人であり、代表である一人の普遍的な牧者の権威の下に、十二使徒がわかちあうものなのです。（続く）

（九二・七・一）

黙想の栞

信仰

不信のトマは…特に現代人の象徴と言えるでしょう。現代人にとっては、感覚で把握できるものだけが真実であり、経験できることがらの範囲を越えた真理は存在しないからです。

創造主、律法者、裁判官である神を否定するか、あるいは肯定しない、という態度を取るだけで、道徳的な相対主義に陥り、善悪の区別がつかなくなり、自動的に倫理性の基準を見失ってしまいます。

自己の刈り入れ

人は誰でも自分の人生の種まき人であり、刈り入れ人です。自分のまいたものを取り入れ、働いて得たものを手にします。刈り入れが祝福に価するものであるように。そして、御父のもとへ「束を手にして、喜び勇んで」帰りつくことのできますように。

苦しむ人に

マリアの七つの悲しみの祈りを特別に捧げることは、信仰の心で人生の重荷を受け入れ、祈りと黙想を通してその重さを主の苦しみと死とに結びつけるための力の源となるでしょう。日々の圧迫や心配ごとを辛抱強く忍ぶことによって、自らを清めると同時に、教会と世界をも清めるのです。

キリストの死と復活の光に照らすとき、病はもはや否定的でしかない出来事ではなく、「神の訪れ」の機会となることでしょう。

この世は有限

特定の思想傾向の人たちは、悲しむべき幻想に負けて、この世と人間は絶対的なものであると信じています。創造の言葉を偏見なく解釈しようとする人なら、この世の美だけでなく限界をも考慮にいれて、容易にその真理をつかむことができるでしょう。どんなにすばらしくても、この世は限りある存在であり、無限の世界を反映するにすぎません。それ自身相対的であり、絶対的なものを必要としているのです。

罪

罪の本質は、神に対する侮辱です。罪とは善の掟を破り、罪の支配に屈し、知りつつ自由意志をもって創造主の摂理に反抗する被造物の邪悪な行為です。神の尊厳に対する侮辱です。

人間が神と和解するなら、それはすなわち、人間同士の和解が実現したことになります。聖書に啓示されているように、罪を犯すと人間は神から離れ、あげくの果てには人間同士の分裂を生じます。神と敵対したり、神と袂を分かったりすれば、人は仲間からも離れてしまうからです。

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部八十円　送料実費　■一年予約九百円　送料六百円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393